

# 牛女

小川未明

青空文庫



ある村に、脊の高い、大きな女がありました。あまり大きいので、くびを垂れて歩きました。その女は、おしでありました。性質は、いたってやさしく、涙もろくて、よく、一人の子供をかわいがりました。

女は、いつも黒いような着物をきていました。ただ子供と二人ぎりでありました。まだ年のいかないうちの子供の手を引いて、道を歩いているのを、村の人はよく見たのであります。そして、大女でやさしいところから、だれがいったものか「牛女」と名づけたのであります。

村の子供らは、この女が通ると、「牛女」が通ったといつて、珍しいものでも見るように、みんなして、後ろについていつて、いろいろのことをいはいはやしましたけれど、女はおしで、耳が聞こえませんが、黙つて、いつものように下を向いて、のそりのそりと歩いてゆくようですが、いかにもかわいそうであつたのであります。

牛女は、自分の子供をかわいがることは、一通りでありませんでした。自分が不具者だということも、子供が、不具者の子だから、みんなにばかにされるのだろうということも、父親がないから、ほかにだれも子供を育ててくれるものがないということも、

よく知つていました。

それですから、いつそう子供に対する不憫がましたとみえて、子供をかわいがつたのであります。

子供は男の子で、母親を慕いました。そして、母親のゆくところへは、どこへでもついてゆきました。

牛女は、大女で、力も、またほかの人たちよりは、幾倍もありましたうえに、性質が、やさしくあつたから、人々は、牛女に力仕事を頼みました。たきぎをしよつたり、石を運んだり、また、荷物をかつがしたり、いろいろのことを頼みました。牛女は、よく働きました。そして、その金で二人は、その日、その日を暮らしてしました。

こんなに大きくて、力の強い牛女も、病氣になりました。どんなものでも、病氣にかからないものはないであります。しかも、牛女の病氣は、なかなか重かつたのであります。そして働くこともできなくなりました。

牛女は、自分は死ぬのでないかと思ひました。もし、自分が死ぬようなことがあつたなら、子供をだれが見てくれようと思ひました。そう思うと、たとえ死んでも死にきれ

ない。自分の靈魂は、なにかに化けてきても、きつと子供の行く末を見守ろうと思いました。牛女の大きなやさしい目の中から、大粒の涙が、ぼとりぼとりと流れたのであります。

しかし、運命には牛女も、しかたがなかったとみえます。病気が重くなつて、とうとう牛女は死んでしまいました。

村の人々は、牛女をかわいそうに思いました。どんなに置いていった子供のことに心を取らたろうと、だれしも深く察して、牛女をあわれまぬものはなかったのです。

人々は寄り集まつて、牛女の葬式を出して、墓地にうずめてやりました。そして、後に残つた子供を、みんながめんどろを見て育ててやることになりました。

子供は、この家から、かしの家へというふうに移り変わつて、だんだん月日とともに大きくなつていったのであります。しかし、うれしいこと、また、悲しいことがあるにつけて、子供は死んだ母親を恋しく思いました。

村には、春がき、夏がき、秋となり、冬となりました。子供は、だんだん死んだ母親をなつかしく思い、恋しく思うばかりでありました。

ある冬の日のこと、子供は、村はずれに立って、かなたの国境の山々をながめて  
 いますと、大きな山の半腹に、母の姿がはつきりと、真っ白な雪の上に黒く浮き出して  
 見えたのであります。これを見ると、子供はびつくりしました。けれど、このことを口に出  
 してだれにもいいませんでした。

子供は、母親が恋しくなると、村はずれに立って、かなたの山を見ました。すると、  
 天気の良い晴れた日には、いつでも母親の黒い姿をありありと見る事ができたのです。  
 ちようど母親は、黙って、じつとこちらを見つめて、我が子の身の上を見守っているよ  
 うに思われたのであります。

子供は、口に出して、そのことをいいませんでしたけれど、いつか村人は、ついにこ  
 れを見つけました。

「西の山に、牛女が現れた。」と、いいふらしました。そして、みんな外に出て、西  
 の山をながめたのであります。

「きつと、子供のことを思つて、あの山に現れたのだらう。」と、みんなは口々にいい  
 ました。子供らは、天気の良い晩方には、西の国境の山の方を見て、

「牛女！ 牛女！」と、口々にいって、その話でもちきったのです。

ところが、いつしか春がきて、雪が消えかかると、牛女の姿もだんだんうすくなくなって、まったく雪が消えてしまふ春の半ばごろになると、牛女の姿は見られなくなつてしまつたのです。

しかし、冬となつて、雪が山に積もり里に降るところになると、西の山に、またしても、ありありと牛女の黒い姿が現れました。村の人々や子供らは冬の間、牛女のうわさでもちきりました。そして、牛女の残していつた子供は、恋しい母親の姿を、まいにち毎日のように村はずれに立つてながめたのであります。

「牛女が、また西の山に現れた。あんなに子供の身の上を心配している。かわいそうなものだ。」と、村人はいつて、その子供のめんどろをよく見てやつたのです。

やがて春がきて、暖かになると、牛女の姿は、その雪とともに消えてしまつたのであります。

こうして、くる年も、くる年も、西の山に牛女の黒い姿は現れました。そのうちに、子供は大きくなつたものですから、この村から程近い、町のある商家へ、奉公させられることになつたのであります。

子供は、町にいつてからも、西の山を見て恋しい母親の姿をながめました。村の人

と々は、その子供がいなくなつてからも、雪が降つて、西の山に牛女の姿が現れると、母親と、子供の情合ひについて、語り合つたのでありました。

「ああ、牛女の姿があんなにうすくなつたもの、暖かになつたはずだ。」と、しまいには、季節の移り変わりを、牛女について人々はいうようになったのでした。

牛女の子供は、ある年の春、西の山に現れた母親の許しも受けずに、かつてにその商家から飛び出して、汽車に乗つて、故郷を見捨て、南の方の国へいつてしまつたのであります。

村の人も、町の人も、もうだれも、その子供のことについて、その後のことを知ることができませんでした。そのうちに、夏も過ぎ、秋も去つて、冬となりました。

やがて、山にも、村にも、町にも、雪が降つて積もりました。ただ不思議なのは、どうしたことが、今年にかぎつて、西の山に牛女の姿が見えないことでありました。

人々は、牛女の姿が見えないのをいぶかしがつて、

「子供が、もう町にいなくなつたから、牛女は見守る必要がなくなつたのだろう。」と、語り合いました。

その冬も、いつしか過ぎて春がきたころであります。町の中には、まだどこどころに

雪ゆきが消きえずに残のこっていました。ある日ひの夜よるのことであります。町まちの中なかを大おおきな女おんなが、のそりのそりと歩あるいていました。それを見みた人々ひとびとは、びっくりしました。まさしく、それは牛うしおんな女なであつたからであります。

どうして牛うしおんな女なが、どこからきたものかと、みんなは語かたり合あひました。人々ひとびとはその後のちもたびたび真夜中まよなかに、牛うしおんな女ながさびしそうに町まちの中なかを歩あるている姿すがたを見みたのでありました。

「きつと牛うしおんな女なは、子供こどもが故郷こきようから出でていつてしまったのを知しらないのだろう。それで、この町まちの中なかを歩あるいて、子供こどもを探さがしているのにちがいない。」と、人々ひとびとはいいました。

雪ゆきがまつたく消きえて、町まちの中なかには跡あとをも止とめなくなりました。木々きぎは、みんな銀色ぎんいろの芽めをふいて、夜よるもうす明あかるくていい季節きせつとなりました。

ある夜よ、人ひとは牛うしおんな女なが町まちの暗くらい路次ろじに立たつて、さめざめと泣ないているのを見みたといひます。しかしその後のち、だれひとり、また牛うしおんな女なの姿すがたを見みたものがありません。牛うしおんな女なはどうしたことか、もはやこの町まちにはおらなかつたのです。

その年とし以来いらい、冬ふゆになつても、ふたたび山やまには牛うしおんな女なの黒くろい姿すがたは見みえなかつたのであります。

牛女の子供は、南の方の雪の降らない国へいつて、そこでいつしよけんめいに働きました。そして、かなりの金持ちとなりました。そうすると、自分の生まれた国がなつかしくなったのであります。国へ帰つても、母親もなければ、兄弟もありませんけれど、子供の時分に自分を育ててくれたしんせつな人々がありました。彼は、その人たちや、村のことを思い出しました。その人たちに対して、お礼をいわなければならぬと思いました。

子供は、たくさんの土産物と、お金とを持って、はるばると故郷に帰つてきたのであります。そして、村の人々に厚くお礼を申しました。村の人たちは、牛女の子供が出世をしたのを喜び、祝いました。

牛女の子供は、なにか、自分は事業をしなければならぬと考えました。そこで村に広い地面を買つて、たくさんのりんごの木を植えました。大きないりんごの実を結ばして、それを諸国に出そうとしたのであります。

彼は、多くの人を雇つて、木に肥料をやつたり、冬になると囲いをして、雪のために折れないように手をかけたりしました。そのうちに木はだんだん大きく伸びて、ある年の春には、広い畑一面に、さながら雪の降つたように、りんごの花が咲きました。太陽は

終日、花の上を明るく照らして、みつばちは、朝から日の暮れるまで、花の中をうなりつづけていました。

初夏のころには、青い、小さな実が鈴生りになりました。そして、その実がだんだん大きくなりかけた時分に、一時に虫がついて、畑全体にりんごの実が落ちてしまいました。明るくなる年も、その明るくなる年も、同じように、りんごの実は落ちてしまいました。それはなんとなく、子細のあるらしいことでありました。村のもののわかつたじいさんは、牛女の子の子どもに向かつて、

「なにかのたたりかもしれない。おまえさんには、心あたりになるようなことはないかな。」と、あるとき、聞きました。牛女の子の子どもは、そのときは、なにもそれについて思ひ出すことはありませんでした。

しかし、彼はひとりとなつて、静かに考えたとき、自分は町から出て、遠方へいった時分にも、母親の靈魂に無断であつたことを思いました。また、故郷へ帰つてきてからも、母親のお墓におまいりをしたばかりで、まだ法事も営まなかつたことを思い出ししました。

あれほど、母親は、自分をかわいがつてくれたのに、そして、死んでからもああして

自分の身の上を守つてくれたのに、自分はそれに対して、あまり冷淡であつたことに、心づきました。きつと、これは母の怒りであらうと思ひましたから、子供は、懇ろに母親の靈魂を弔つて、坊さん呼び、村の人々を呼び、真心をこめて母親の法事を営んだのであります。

明くる年の春、またりんごの花は真つ白に雪のごとく咲きました。そして、夏には、青々と実りました。毎年このころになると、悪い虫がつくのでありますから、今年はどうか満足に実を結ばせたいと思ひました。

すると、その年の夏の日暮れ方のことであります。どこからとなく、たくさんのこうもりが飛んできて、毎晩のようにりんご畑の上を飛びまわつて、悪い虫をみんな食べたのであります。その中に、一ぴき大きなこうもりがありました。その大きなこうもりは、ちょうど女王のように、ほかのこうもりを率いているごとく、見えました。月が円く、東の空から上る晩も、また、黒雲が出て外の真つ暗な晩も、こうもりは、りんご畑の上を飛びまわりました。その年は、りんごに虫がつかずよく実つて、予想したよりも、多くの収穫があつたのであります。村の人々は、たがいに語らいました。

「牛女が、こうもりになつてきて、子供の身の上を守るんだ。」と、そのやさしい、

情じょうの深ふかい、心根こころねを哀あわれに思おもったのであります。

また、つぎの、つぎの年としも、夏なつになると、一おびきの大おきなここうもりが、多おくのここうもりを率ひきいてきて、りんご畑ばたけの上うえを毎まい晩ばんのようとに飛とびまわりました。そして、りんごには、おかげで悪わるい虫むしがつかずによく実みりました。

ここうして、それから四よ、五年ねんの後のちには、牛うし女おんなの子こ供どもは、この地ち方ほうでの幸こう福ふくな身みの上うえの百ひゃく姓しょうとなつたのであります。



# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 ㊀ 講談社

1976（昭和51）年11月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第7刷発行

初出：「おとぎの世界」

1919（大正8）年5月

※表題は底本では、「牛女《うしおんな》」となっています。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：ぷろぼの青空工作員チーム校正班

2011年11月2日作成

2012年1月10日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 牛女

小川未明

2020年 7月18日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>